

外国語教育メディア学会（LET）
関西支部 2019 年度秋季研究大会
発表要項集



日 時： 2019年10月5日（土）12:00～17:30

場 所： 広島大学 東千田キャンパス 東千田未来創生センター
〒730-0053 広島市中区東千田町 1-1-89
<https://www.hiroshima-u.ac.jp/access/sendai>

主 催： 外国語教育メディア学会（LET）関西支部
<http://www.let-kansai.org/>

事務局： 外国語教育メディア学会（LET）関西支部事務局
〒112-8551 東京都文京区春日 1-13-27
中央大学 理工学部 山西博之 研究室内
E-mail： kansaiilet@gmail.com

プログラム

11:30-16:00

受付■ ロビー (1F)

11:30-16:00

業者展示■ 2F ロビー

12:00-12:15

開会行事■ グループワーク室

司会◆ 山西 博之 (事務局長・中央大学)

挨拶◆ 菅井 康祐 (支部長・近畿大学)

12:20-13:40

ワークショップ1■ 計算機室 (当日先着順で30名まで)

アナログからデジタルへのきっかけづくり「使える！楽しい！子どもたちが喜ぶICTワークショップ」

講師◆ 小山 敏子 (大阪大谷大学) 深田 将揮 (畿央大学)

司会◆ 森田 光宏 (広島大学)

※ワークショップはパソコンルームで実施されますが、ご自分のPCでやってみたい方はご持参ください。必ず、Microsoft OfficeがインストールされたPCを持参してください。

ワークショップ2■ M202教室 (当日先着順で40名まで)

「思考力、判断力、表現力等」を育む指導の工夫～技能統合型言語活動を通して～

講師◆ 胡子 美由紀 (広島市立古田中学校)

司会◆ 鬼田 崇作 (広島大学)

13:50-15:30

研究発表・実践報告・Classroom Tips

① 13:50-14:20 ② 14:25-14:55 ③ 15:00-15:30

第1室 (研究発表・実践報告・Classroom Tips) ■ M201教室

司会◆ 田村 祐 (関西大学)

① [実] Using Social Media to Cultivate Critical Thinking, Empathy and Historical Awareness Among ESL Learners

Patrick Naoya Shorb (関西国際大学)

② [研] プロジェクト型英語授業とICT活用の合理的相関についての考察：BYODの次なる段階を見据えて

木村 修平 (立命館大学)

③ [CT] 最小限の時間でクラス全員に毎時間スピーチ発表練習を

野村 和宏 (神戸市外国語大学)

第2室（研究発表・Classroom Tips）■ M202 教室

司会◆ 大和 知史（神戸大学）

- ① [研] 即興的なやり取りと発表を用いた話す力の育成と評価 — One minute speech と Two minutes dialog を帯活動とした取り組み —
我妻 夏（大阪市立桃谷中学校）
- ② [研] チャンクの習得と統語構造の発達：スピーキング・タスクとライティング・タスクを用いて
道本 祐子（宇部工業高等専門学校）
- ③ [CT] 合理的配慮に有用なツールは外国語学習にも役立つ
清原 文代（大阪府立大学）

第3室（研究発表・実践報告）■ M204 教室

司会◆ 森田 光宏（広島大学）

- ① [研] 地域に貢献する英語を目指して：外国人宿泊客への接客に関するニーズ分析をもとに
岩田 聖子（追手門学院大学）
岩井 千春（大阪府立大学）
- ② [実] オンライン教材への異なる指示の効果
森田 光宏（広島大学）
高橋 有加（広島大学）

15:30-15:50

休憩（業者展示をご覧ください）

15:50-17:20

公開シンポジウム■ グループワーク室

小・中・高の外国語科における「思考力・判断力・表現力」の育成

講師◆ 酒井 英樹（信州大学）
胡子 美由紀（広島市立古田中学校）
亘理 陽一（静岡大学）
講師紹介◆ 今井 裕之（関西大学）

17:20-17:30

閉会行事■ グループワーク室

司会◆ 山西 博之（事務局長・中央大学）
挨拶◆ 野村 和宏（副支部長・神戸市外国語大学）

17:40-19:00

懇親会■ 1F BIBLA Senda

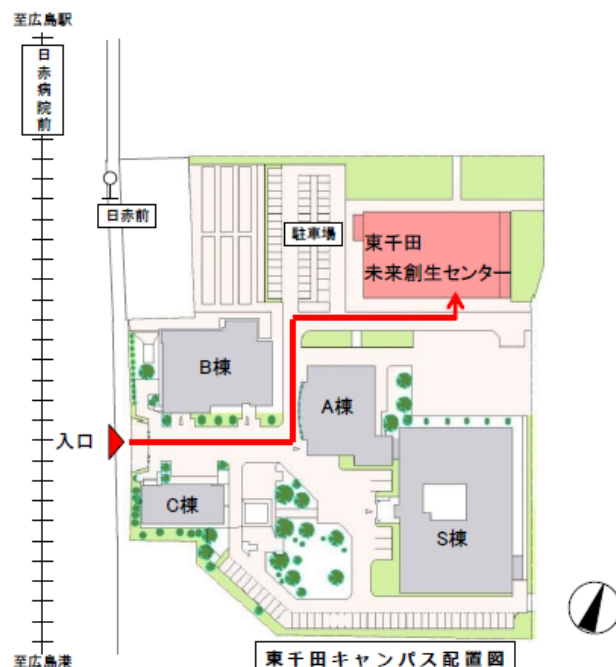
司会◆ 山内 優佳（広島文化学園大学）
挨拶◆ 小山 敏子（副支部長・大阪大谷大学）

お知らせ

- 参加者は、受付にて必ず参加登録票にご記入のうえ、ネームホルダーをお受け取りください。LET 会員の参加料は無料です。非会員の方は当日会費 2,000 円（大学院生は学生証を提示していただくと 1,000 円）を受付でお支払いください。また、学部生は無料でご参加いただけます。なお、支部大会当日のご入会も可能ですので、支部事務局（受付）までお申し出ください。
- ワークショップ 1 に参加希望の方はパソコンルームで実施されますが、ご自分の PC でやってみたい方はご持参ください。必ず、Microsoft OFFICE がインストールされた PC を持参してください。
- 館内は全面禁煙です。
- 構内に駐車場はございません（地図上の駐車場は一般使用不可）。公共交通機関をご利用ください。
- 懇親会は 1 階 BIBLA Senda にて開催いたします。参加費は 2,000 円（学生 1,000 円）です。当日受付にてお申し込みください。

会場への交通案内・会場案内図

- **J R 広島駅からお越しの方：バス利用** アルパーク方面行き 広島バス（50 号（東西線））で約 12 分（220 円）日赤前下車（徒歩 2 分）
- **J R 広島駅からお越しの方：市内電車利用** 紙屋町経由広島港行き 広電（1 号線）で約 30 分（180 円）日赤病院前下車（徒歩 3 分）
- **広島空港からお越しの方** (1)広島空港リムジンバス 広島駅新幹線口行きで約 45 分（1,340 円）JR 広島駅より上記バスまた市内電車利用
(2)広島空港リムジンバス 広島バスセンター行きで約 53 分（1,340 円）広島バスセンターから地下街「シャレオ」を通り、広電「本通」電停 市内電車（広電 1, 3, 7 号線）で約 10 分 日赤病院前下車（徒歩 3 分）



出展企業（賛助会員）の企業概要・今大会での出展内容

各賛助会員の展示に、ぜひお立ち寄りください！

1. チエル株式会社
BYOD 環境を用いた英語 4 技能の習得・向上を実現する最新版 MALL システムをご紹介します。 頂きます。
2. 株式会社 桐原書店
桐原書店は TOEIC 対策問題集や Speaking & Writing Test などを通じ、大学英語教育に貢献することを目指します。
3. 株式会社 エル・インターフェース
TOEFL/TOEIC 対策に最適！スーパー英語 Academic Express 3
4. 株式会社 内田洋行
株式会社内田洋行は、進んだ ICT 技術と外国語教育との高いレベルでの融合を目指している教育に特化した専門商社です。
5. 株式会社 成美堂
弊社は大学教養課程向けの英文テキストと e-Learning 教材を開発・ご提供している会社です。
6. リアリーイングリッシュ株式会社
Reallyenglish は入学前教育向け等すぐに導入可能な e ラーニング教材を提供しております。
7. 株式会社 アルク
アルクは全国の大学で英語教育のお手伝いをしており、特に英語 e ラーニングシステム「ALC NeAcademy NEXT」のご活用事例が多くございます。授業との連動利用から自己学習利用まで幅広い活用方法がございますので是非ブースにお立ち寄りください。

※展示区画順

小学校外国語教育における「思考力、判断力、表現力等」の指導

酒井 英樹（信州大学）

学習指導要領が改訂され、外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理された。小学校外国語の指導にあたっては、「知識及び技能」や「学びに向かう力、人間性等」の側面に教師の目が行きがちであるが、外国語学習の初期の段階においても「思考力、判断力、表現力等」の側面もきちんと捉える必要がある。

小学校学習指導要領の外国語科では、「思考力、判断力、表現力等」に関わる資質・能力に関して、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。」としている。すなわち、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて英語を運用する際に、思考力、判断力、表現力等が活用されることになる。指導にあたっては、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を明確にした言語活動を設定することが鍵となる。また、言語活動の中で学ぶ際には、対話的な学びや気づきが重要である。さらに、各教科で育成すべき「見方・考え方」も、「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力を考えるポイントとなる。

本発表では、「思考力、判断力、表現力等」、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」、「コミュニケーションを行う目的・場面・状況等」、「言語活動」、「気づき」などをキーワードに、児童の思考力、判断力、表現力等をどのように捉えるかを具体的に紹介し、どのような手立てや支援が可能かについて提案する。

思考力・判断力・表現力等を育成する中学校外国語科授業の実際

胡子 美由紀（広島市立古田中学校）

1. はじめに

2020年より実施される学習指導要領には、「生きて働く『知識・技能』『未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』『学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』」からなる学力の三要素を育成することが求められている。そのためには、外国語科の言語活動において、実社会や実生活と関わる真正の課題に主体的に取り組んだり、他者とのやりとりを通じて多様な考えを知り、それらを深めたりする学びが必要だ。

2. 「思考力・判断力・表現力等」がなぜ必要か

知識基盤社会と言われる今日、新しい知識・技術・情報が社会のあらゆる領域の基盤となっている。変化が激しい社会の中で、未知の課題に対応していくことが求められている。また、社会の変化に応じて、他者と切磋琢磨しながら既存の知識・技術を基盤に新たなアイデアを生み出し、それを活用・実践できる力がこれからの生きる子どもたちの可能性を広げることは間違いない。

初めて遭遇するさまざまな事柄を既存の知識や情報と関連づけ、新たな考えや意味を見出したり、課題解決したりするには、生徒たちの学びの営みの中で、それらを捉える見方や考え方も含めた「思考力・判断力・表現力等」が活用されていくことが要になる。現状では、全国学力・状況調査の結果からも「知識・技能」を活用すること、すなわち「思考力・判断力・表現力等」の活用において課題があることが分かっている。

中学校外国語科の授業では、母国語ではできる思考・判断と外国語で表現することの間に高いハードルがあり、習得・活用が目的の言語活動とかけ離れたものになってしまっているケースが多くないだろうか。また、言語活動自体が行われていなかったり、課題設定のレベルが適切でなく、生徒の興味のわく題材でないために、思考・判断するに及ばなかったりすることもある。何より現場の教師たちの中には、生徒たちの豊かな学びを育む授業の実現をハイレベルで難しいことだと捉える傾向が強い方が多い。依然として生徒たちが受身にならざるを得ない授業が行われているのが現状だ。

3. 中学校における「思考力・判断力・表現力等」を育成する授業

「知識・技能」の習得と「思考力・判断力・表現力等」は関連し合いながら共に伸びていくものだ。4技能（5領域）を総合的に育成できる活用型言語活動を通して、「知識・技能」を確実に習得させ、これらを活用し課題解決に必要な「思考力・判断力・表現力等」の育成と実際のコミュニケーションの場において自分の考えや情報を伝え合う力の育成を目指した授業を展開するには何が必要だろうか。

「学び合い」がそのキーワードの一つとなるだろう。「学び合い」が教室内で行われることで主体的に学ぶ姿が見られるようになる。また、他者とのやりとりにより多種多様な情報を得、自分の考えを言語化することで自分の中にあるものを確認したり構造化したりすることができる。さらに他者との学びの中で新しい発見をすることもできる。このような主体的・対話的で深い学びの過程の繰り返しと積み重ねを通して「思考力・判断力・表現力」は育成されていく。

そこで、中学校現場での実践を踏まえて、特に生徒たちが課題発見・解決に向け主体的・能動的に学び合う「主体的・対話的で深い学び」の観点から、「思考力・判断力・表現力」を育むための授業デザイン、活用型言語活動の具体例やそれを支える知識・技能との関連づけ、また、生徒が本気になって自分の思いや考えを語り、真剣に取り組むことのできる課題についてフロアの方々と共有したい。

思考・判断・表現のための知識・技能、知識・技能のための 思考・判断・表現：高等学校における単元構成

亙理 陽一（静岡大学）

知識・技能に裏打ちされない思考・判断・表現は空疎で、思考・判断・表現に供さずそれに触発されもしない知識・技能も生徒に響かないということを、高等学校の単元構成を事例に論じたい。

ラピュタの内部のような学習指導要領(以下㊦)の構成・記述を見ていると、それだけで思考・判断が停止し表現の意欲も萎えてしまうのだが、「思考力、判断力、表現力等」の内容は、小中高共通で「情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項」として記述されている。目標レベルでの高等学校の小中学校との違いは、「(「簡単な」という限定が取れた)「情報や考え」の「要点、詳細、話し手や書き手の意図など」を理解する際の「的確さ」と、それを活用して表現したり伝え合ったりする際の「適切さ」が求められることにあり、内容についても各事項にそれに応じた文言が追加されている。しかし、そのために必要となるはずの「知識・技能」の内容については、「英語の特徴やきまりに関する事項」が挙げられているのみで、技能面のサブスキルには言及がない。一方で、両者を「相互に関係し合いながら育成」することを重視する次期㊦では、「言語活動及び言語の働きに関する事項」の解説に、各領域の複数の(統合的)言語活動について驚くほど詳細な説明が与えられている。ただし、ここで示されているのは活動のジャンルや条件等であって、そのために具体的にどのような知識・技能が求められ、こうした活動が生徒の知識・技能をどういう点で深めると言えるのかは明らかではない。

要するに次期㊦は、両者を「一体的に育成する」ことを謳ってはいるが、「思考力、判断力、表現力等」を要求する(統合的)言語活動の中で「知識・技能」を身につけさせようとする(これまでも言語活動主義として推し進めてきた)立場をいっそう明確に打ち出していると言える。それが経験主義的なものに終始するか構成主義的なものとなるかは、具体的な活動で求められる思考・判断・表現とそのために必要となる知識・技能の内容についての用意周到な吟味にかかっており、それは良い意味でも悪い意味でも教員に放り投げられている。ましてやそれを「理解の的確さ」や「やり取りの適切さ」が問われるような水準で行おうとするのであれば、こま切れの一時間の授業ではなく、単元以上のサイズのデザインを要求するものとなることは明らかであろう。

そのような単元構成の試みとして、報告者が共同研究者として授業づくりに関わる高校での実践を紹介する。ポイントは、(1) 単元内で生徒が受容する内容に有用な概念や複数の視点が含まれていること、(2) 単元末に求める活動でそれが生かされ、同じ技能を使用する経験が単元内に確保されていること、(3) 思考・判断・表現において期待されるパフォーマンスが評価の観点として教師・生徒に共有されており、単元を通じて一貫していること、(4) 教師がそのパフォーマンスのために必要となる知識・技能を具体的に想定できていること、(5) 自他のパフォーマンスを通じて、生徒が手応えと伸びしろの実感を持って単元を振り返れることである。

生徒のそれを伸ばそうとする際、問われるのは結局、授業に対する教師の「思考力、判断力、表現力」である。われわれのなすべきことは、求められること・したいこと・できることの狭間で批判的思考を続け、生徒の学びに必要なことを適宜判断し、授業においてそれを表現し続けること以外にない。さあ、そのための知識・技能は十分か(以上の発表要旨を英語で簡潔にまとめ、自分の意見を加えてALTに伝え、どう思うか聞いてみよう[4点])。

アナログからデジタルへのきっかけづくり 「使える！楽しい！子どもたちが喜ぶ ICT ワークショップ」

小山 敏子（大阪大谷大学）・深田 将揮（畿央大学）

『学習指導要領』には、どの校種、どの教科においても「ICT の活用」が明記されています。各学校園では無線 LAN の設置や電子黒板の導入などが着々と進んでいるようです。けれども、実際の教育現場では、パッケージ化された教材を使うにもベースとなる知識が必要ですし、日々の授業の教材作りや校務には、PC の環境に左右されない「誰でも使える」ツールが便利であったりします。

そこで、本ワークショップでは、手元の PC で手間暇かけずにできるお役立ちツールを紹介し、実際に作成していただけたらと思います。まず、Dropbox を使ってファイルを共有した後に Windows アクセサリの Snipping Tool の紹介や MS Word の基本ツールを復習します。

次に、楽しい授業づくりで役立ちそうな WEB サイトやアプリケーションを紹介していきます。さらに、Google フォームを使って、1) アンケートフォーム（図 1）、2) 学習ポートフォリオ（図 2）の作成方法について説明し、先生方にも実際に作って頂けたらと考えています。

**コミュニケーション英語
授業アンケート**

このアンケートは、畿央第一高等学校（深田担当）、コミュニケーション英語の授業アンケートです。
ご協力願います。

*必須

1. あなたの性別は*

男

女

2. あなたのクラスは*

1組

2組

3組

その他: _____

3. この授業の満足度は*

非常に満足

満足

普通

図 1

英語学習ポートフォリオ

このフォームは、英語の学習した後に毎日記録するポートフォリオになります。

*必須

あなたの氏名*

回答を入力

本日の日付*

YYYY MM DD

2019 / /

今回の学習で学んだこと（学んだ語彙、表現、内容等具体的に記述しましょう。）*

回答を入力

復習内容について今回の学習を通してできなかった事で復習すべき内容（具体的かつ実行可能な内容で記述しましょう。）*

回答を入力

今回の学習を通して感想、意見、自身の変化等を記述してください。*

回答を入力

送信

図 2

Google フォームを使えばこのようなフォームが無料で簡単に作成できます。また、レスポンスは自動的に集計され、リアルタイムの回答状況やグラフも見ることもできます。このようなフォームは、授業のみならず、校務でも活用できるお役立ちツールです。

なお、このワークショップはパソコンルームで実施されますが、ご自分の PC でやってみたい方は、Microsoft Office がインストールされた My PC をご持参ください。

さあ、私たちと一緒に子どもたちが喜ぶ ICT 活用を始めてみませんか。

「思考力・判断力・表現力等」を育む指導の工夫

～技能統合型言語活動を通して～

胡子 美由紀（広島市立古田中学校）

新学習指導要領における外国語教育の方向性は、教師が「何を教えたか」ではなく、生徒が「何をできるようになったか」、学習到達目標を具体的に示し、生徒の「主体的・対話的で深い学び」の場を提供することにある。そして、「英語によるコミュニケーションの見方・考え方」を働かせるための学習プロセスの改善を図り、単なる「知識・技能」の習得で終わるのではなく、それらをどのように使うことができるかという「思考・判断・表現力等」や、「学びに向かう力、人間性」などを合わせて育成するとしている。

学校教育の主たる目的は、人格形成と学力形成である。人間性を高める教養と共に他者と創造的に協同するコミュニケーション力を身につけさせ、生涯にわたり主体的に学び続ける自律的学習者を育てることである。「英語が使えるようになれば、自分自身の可能性や世界が広がる。」授業を通して英語への興味・関心を引き上げ、もっと学びたいという気持ちを導く、そんな学びの場を生徒に与え続けていかななくてはならない。

しかし、従来の日本の外国語教育では、「習ってから使う（習ってからでない外国語は使えない）」という発想から、正確さ（accuracy）に偏った指導が行われてきている。解説により英語の語彙や文法の習得を重視し、英語力を身につけさせることが、表現力を伸ばすという考えに基づいた授業だ。そういった授業では、知識はあるがアウトプットする中で思考したり心が動いたりすることはほぼなく、発信者として主体となるべき生徒自身が表現する場や状況は生まれづらい。教師主導による知識伝達・注入型の授業によって、文法や発話の正確さを求めるあまりに、発話に臆病で自信のない生徒を生み出してきたのではないだろうか。

グローバル化が加速する日本社会で、生徒たちが既に持っている「知識・技能」を活用して「思考力・判断力・表現力等」を身につけ、豊かなコミュニケーションを図る力をつけることがさらに求められている。そのために、正確さ重視から脱却し、流暢さ（fluency）と即興性（improvisation）を向上させることが鍵である。言語材料については、英語の知識の習得などに終始するのではなく、言語活動を通して使いながら実際に活用できるような指導になっていくことが必要だ。

本来、外国語によるコミュニケーションとは、言語操作や原稿を読んだり伝えたいことを暗記したりすることではない。外国語でのやりとりを通し、臨機応変に対応できる力を育み、必要な表現を獲得していくことが真の英語力となり運用力を身につけることにつながる。表現したいけれどできないというもどかしさを経験することで、表現の幅も広がっていく。

以上をふまえ、発話の即興力と瞬発力を育て、生徒の深い思考を促す技能統合型の言語活動とそれらを可能にする授業デザインや学習環境づくりについてご紹介する。実際の授業の様子も動画でご覧いただく。「生徒が即興で英語を話せるようになる工夫（やり取りと発表）」や「思考を促す発問」「協同的に学ばせるコツ」をワークショップを通じてご体験いただき理解を深めていただけたらと思っている。

Using Social Media to Cultivate Critical Thinking, Empathy and Historical Awareness Among ESL Learners

ESL 学習者の批判的思考、共感、歴史的認識を共有するための SOCIAL MEDIA の一つの活用方法

Patrick Naoya Shorb (Kansai University of International Studies)

キーワード : Social Media, ESL, Critical Thinking

1. Background

One of the persistent challenges of developing an “international” curriculum in Japan and elsewhere is in the need to simultaneously develop student’s English-language proficiency while also developing general academic skills such as critical thinking (Coyle, Hood, Marsh & 2010). For those instructors whose academic specialty is history, this challenge is increased by the general “forced-fed,” rote-memory based approach to teaching history in high school where students learn World History or Japanese History in preparation for college entrance examinations. Too many students see history as simply a collection of obscure facts, names and dates with little relevance to one’s own immediate life. These factors also contribute to an overall predisposition among high school students to see the world in black-and-white, “right” vs “wrong” terms – what William Perry has characterized more generally as a *dualistic* stage of intellectual and ethical development (Perry, 1968) common among late teens.

How then, do instructors of history, but particularly instructors of history to English as Second Language (ESL) learners encourage students to look at the world in more complex, *multiplicitous* terms while also being mindful of the limits of their language proficiency? Building on the learning observations of Knefelkamp (1999), one approach is to create a structured and experiential pedagogy that scaffolds more complex –but relevant-- ways to understand the world. Additionally, through the use of visual media such as Youtube and Facebook, this complexity can be introduced to students at varying levels of English-level difficulty.

2. Participants and Procedures

Through eight different mock lectures at Open Campus’s and University Experience visits to senior high school students between 2017-2018, this instructor was able to deliver an active learning workshop that encourages students to look at the world in a more critical, yet emphatic and historically conscious way. Through use of a once popular Facebook video clip, students are introduced to a “mystery” of sorts that forces them to engage in key critical thinking (and historical) activities as evaluating the trustworthiness of source, inductive reasoning and the use of empathy to assume a different point of view. Midway through, this activity takes an unexpected turn as these students (most of whom are from Tohoku area high schools) are prompted to remember the most “historic” event in their own lifetime, but from a very different point of view: the 2011 Great Eastern Japan Earthquake. After a group discussion of both the video clips and their own experiences during this catastrophe, students are asked to reflect upon the nature of historical sources, point of view and historical causality.

References

- Coyle D., Hood P., & Marsh D. (2010). *Content and language integrated learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Knefelkamp, L., (1999). Introduction. In W.G. Perry, Jr, *Forms of ethical and intellectual development in the college years: A scheme*. (reprint) San Francisco: Jossey-Bass. xi-xxxvii.
- Perry, W. (1968). *Forms of ethical and intellectual development in the college years: A scheme*. New York: Holt Rinehart & Winston

プロジェクト型英語授業と ICT 活用の合理的相関についての考察： BYOD の次なる段階を見据えて

Reasonable Relation Between ICT and Tasks of Project-based English Class: Beyond BYOD

木村 修平(立命館大学)

キーワード： BYOD, ICT 活用, プロジェクト型英語授業

1. はじめに

学習者が端末を授業に持ち込んで活用する BYOD (Bring Your Own Device) を推進する大学が近年増加しているが、授業内外のタスクとどのように結びつくかに関しては具体的な報告が少ない。本研究では BYOD 環境下のプロジェクト型英語授業でのタスクを 4 つの要素に分類して ICT (Information and Communication Technology) との関連を示し、ICT が合理的に活用される英語授業の一モデルを提唱する。

2. 授業タスクの 4 分類と対応する ICT の活用例

授業に含まれるタスクを分析した結果、オーサリング、リサーチ、コラボレーション、アウトプットという 4 つの要素に分類できることがわかった (表 1)。

表 1. 参加者の内訳

要素名	対応する授業タスク	タスクに対応する ICT の活用例
オーサリング	進捗や成果を文字やスライド、図表、動画などに記録し保存する。	オフィス系ソフト / 動画編集ソフト / 機械翻訳 / タイピング
リサーチ	プロジェクトに必要な情報の収集や調査を行う。	Web 上の教材参照 / Web やデータベースの検索 / アンケート調査の実施
コラボレーション	他の学生や教員と協同作業や相互評価を行う。	LMS、グループウェア、SNS の活用
アウトプット	口頭発表やライティングの形式で進捗や成果を発表する。	スライド操作 / プリンタ操作 / 音声認識ソフト / 機器の外部出力

3. 結果と考察

立命館大学の 4 学部で実施されているこの授業への情報端末の持ち込み率は 90% を超えており (木村&近藤, 2016)、ICT スキルの伸長に関する自己評価でも概ね肯定的な結果が見られた (木村, 2018)。本研究は BYOD 推進の次なる段階、すなわち授業タスクと ICT の活用が合理的に結びついた実践的な授業モデルの一例を提示しており、さらには情報機器を活用した言語教育の新たな時代の到来を示唆する。

参考文献

- 木村修平&近藤雪絵. (2016). 学生が大学に持ち込む携帯情報端末と学内電子リソースの活用に関する実態調査. 『PC Conference 論文集 (2016)』, 177-180.
- 木村修平. (2018). BYOD 型大学英语プログラムが IT スキルの自己評価に及ぼす影響. 『コンピュータ&エデュケーション』, 45, 127-132.

最小限の時間でクラス全員に毎時間スピーチ発表練習を

How to Make All Students Practice Speaking in Every Lesson Using Minimum Amount of Time

野村 和宏 (神戸市外国語大学)

キーワード : Speech Practice, Communication, Lesson Plan

英語口頭発表能力の向上を目指し、教科書の音読、シャドーイング、スピーチ、プレゼンなどさまざまな指導が行われているが、ここで提案するのは 8 分以内といった最小限の時間で毎時間クラスの全員が立ってスピーチ発表練習を行う方法である。トピックなどを学力レベルに合わせることで、中学、高校、大学のいずれでも応用できる。週明けからすぐに授業で実践できるように、トピックの例、授業の進め方、評価方法など、具体的に紹介する。

即興的なやり取りと発表を用いた話す力の育成と評価

—One minute speech と Two minutes dialog を帯活動とした取り組み—

Impromptu Speech and Assessment in Secondary Education

我妻 夏（大阪市立桃谷中学校）

キーワード： Impromptu, One minute speech, Two minutes dialog, ルーブリック

1. はじめに

平成 26 年 9 月に文部科学省によって示された「今後の英語教育の改善・充実方策について～グローバル化に対応した英語教育改革 5 つの提言～」において小・中・高等学校の授業で発音・語彙・文法等の間違いを恐れず、積極的に英語を使おうとする態度の育成、英語を用いてコミュニケーションを図る体験を積むことの必要性と、中学校ではパフォーマンステストを活用した 4 技能の総合的な評価方法などの検討が今後必要である、と指摘されている。そこで本研究では impromptu speech という「あらかじめ準備することなく、その場において即興で話すこと」に注目し、上記の課題を解決しようと試みた。

2. 方法

平成 27 年度 4 月から前任校において中学 3 年生 38 名を対象に 1 年間ペア活動においてその場で与えられたトピックに基づいて片方が話し、相手が単語数を数える One minute speech と、その場で与えられたトピックについて対話を 2 人で 2 分間続ける Two minutes dialog を取り入れた。

「話すこと」についてのパフォーマンステストを年 7 回実施した。そのうちの 4 回を Impromptu speech のテストとした。

3. 研究にあたって

本研究の授業実践にあたり、広島市立舟入高等学校の西巖弘先生の「ワードカウンター」を One minute speech に使用した。また Impromptu dialog のテスト方式、ルーブリックは Brown(2010)の Five principles をもとに作成した。

4. 結果と考察

ペアでの Impromptu dialog のテストにおいては 20 点中、第 1 回目の平均点が 14.5 点、第 2 回目が 16.5 点であった。第 2 回目は社会的な話題で「思考力・判断力・表現力」が一層求められたが、前回より 2.0 ポイントの増加が見受けられた。また 10 月に 130 校で実施した大阪市全体の統一テスト（3 技能）においては市の平均正答率より 20% 高く、項目別で特徴的なことをあげると「基礎・活用」別では「活用」で 30%、「領域」別では「書くこと」で 28%、「観点」別では「外国語表現の能力」で 38%、「解答形式」別では「記述」で 42% 市平均を上回った。

参考文献

Brown, H. D., & Abeywickrama, P. (2010). *Language assessment: Principles and classroom practices*. NY: Pearson Education ESL.

西巖弘 (2010). 『即興で話す英語力を鍛える！ワードカウンターを活用した驚異のスピーキング活動 22』 東京：明治図書

産出タスクにおける EFL 学習者のチャンクと統語パターンの分析

An analysis of EFL unanalyzed chunks and syntactic patters using self-paced production tasks

道本 祐子 (宇部工業高等専門学校)

キーワード：チャンク，EFL 学習者，産出タスク

1. はじめに

チャンクやFormulaはL2の習得と運用において重要な役割を果たすと言われさまざまに定義されて分類されてきた (e.g. Hakuta, 1974; Ellis, 2012; Weinert, 1995)。またその習得や学習効果については、L2またL1の研究においても、学習者へのインプットとなる語句の「頻度」や「音節」、学習者が記憶し処理できる「語数」などの点から議論されている。近年の研究では、チャンクの習得に影響をおよぼす要素としては、頻度と他の要因（語数や音節、年齢など）との組み合わせを指摘する研究もあり (e.g., Ambridge, et. al., 2015)、さらに学習者に課されるタスクによっても産出されるチャンクのタイプが異なることを考慮すると (e.g., Taguchi, 2007)、実際にどのように学習者がチャンクを用いてL2の習得を進めていくのかは明らかにされていないことが多い。そこで本研究では、スピーキング・タスクとライティング・タスクを用いた実験を行い、EFL学習者の英語疑問文の発達において産出されるチャンクについて検討することとした。

2. 参加者と手順

参加者は、EFL 学習者 (高等専門学校学生) 10 名 (と NS1 名) であった。実験は 2 日間で (約 1 週間をはさむ)、それぞれスピーキング・タスクとライティング・タスクを各 1 時間計 2 時間で実施した。スピーキングでは HSP プログラムを用いて 3 種類のスピーキング・タスクを実施し、ライティングでは机上のペーパーテスト形式により同じ 3 種類のタスクを実施した。

3. 結果と考察

収集したデータは右表のようである。データ分析の結果、EFL 学習者が英語疑問文の産出においては 3~4 音節程度の統語パターンをもつフレームを作り、習得を進めていることが予測された。さらなる追証が必要である。

Participants	Writing		Speaking	
	Sentences	Words	Sentences	Words
1	18	66	17	79
2	18	76	14	56
3	19	69	10	36
4	18	74	17	67
5	19	93	17	87
6	18	93	17	77
7	18	95	17	91
8	18	92	17	87
9	19	99	15	83
10	15	84	14	71
TOTAL	180	841	155	734
NS	16	111	18	144

参考文献

- Ambridge, B., Kidd, E., Rowland, C., & Theakston, A. L. (2015). The ubiquity of frequency effects in first language acquisition, *Journal of Child Language*, 42, 239-273.
- Ellis, N. (2012). Formulaic language and second language acquisition: Zipf and the phrasal Teddy Bear. *Annual Review of Applied Linguistics*, 32, 17-44.
- Hakuta, K. (1974). Prefabricated patterns and the emergence of structure in second language acquisition. *Language Learning*, 24, 287-297.
- Taguchi, N. (2007). Chunk learning and the development of spoken discourse in a Japanese as a foreign language classroom. *Language Teaching Research*, 11, 433-457.
- Weinert, R. (1995). *The role of formulaic language in second language acquisition: A review. Applied Linguistics*, 16, 180-205.

合理的配慮に有用なツールは外国語学習にも役立つ

Tools for reasonable accommodation also work well on foreign language education

清原 文代 (大阪府立大学)

キーワード：合理的配慮，合成音声，外国語学習

合理的配慮が法律で義務づけられ、教室内の情報保証は必須となった。ICT は情報保証に有用である。OneNote のイマーシブリーダーは文字を読むことに困難がある人を、UD トークや PowerPoint の自動字幕機能は音声を聞くことに困難がある人を助けることができる。これらのツールはハンディキャップを持つ人のためだけではなく、外国語学習者にとっても福音となりうることを実演を通じて紹介する。

地域に貢献する英語を目指して： 外国人宿泊客への接客に関するニーズ分析をもとに

Aiming for Tourism English for Regional Development:
Based on Needs Analysis to Accommodation business

岩田 聖子 (追手門学院大学)

岩井 千春 (大阪府立大学)

キーワード： インバウンド、観光英語、ニーズ分析

1. はじめに

訪日旅行促進事業「ビジットジャパン」から15年が過ぎ、訪問先も東京・富士山・京都・大阪などから地方へと広がり、外国語を使う機会がほとんどなかった地域でもインバウンド対策が急務となっている。例えば、「施設等のスタッフとのコミュニケーションが取れない。」というのは、外国人客の満足度の調査で、旅行中最も困ったことに対する最多の回答である。そこで、観光を基幹産業とする地域の人材育成を図る目的で、観光従事者に対して外国人対応に関するアンケートを実施し分析をおこなった。

2. 参加者と手順

英語を主に必要とする観光地における観光従事者を対象にした聞き取り調査を実施した。調査地及び調査対象は、外国人観光客のうち欧米豪からの旅行者が80%を占める世界遺産としても知られる熊野古道地区の宿泊従事者で、主に民宿や旅館の女将からの回答である。発表者は、調査地に関係人口*として長く関わり、その間当事者から耳にした課題(岩田、2019)をまとめてアンケートに反映した。事前に宿泊施設に配布、回収したのち、座談会方式で意見交換をした。出席ができなかった宿泊施設関係者には後日、聞き取り調査を行った。*定住でも観光でもなく、長期的に地域や地域の人々と多様にかかわる人々

3. 結果と考察

多くの宿泊従事者は高齢であり、その英語レベルは、あいさつなどの最低限の意思疎通しかできないと回答している。しかし外国人観光客の受け入れには積極的であり、そのために、接客のための英語指導を要望するよりも、▽スマホやタブレットの翻訳アプリを利用したい▽館内ルールの英語表記を充実させたい▽会話冊子がほしいなどの要望があった。しかし、コミュニケーションがうまくとれなかった時は、「お客様のためにもっと英語を勉強しておけばよかった」という回答が多くあった。一方40歳代、50歳代の宿泊従事者は、接客のための英語指導をしてほしいという回答を寄せた。高齢化が進む地域観光には、the third age (Oxford, 2018)と呼ばれる60歳代以上の働き手が多く、高齢者に向けた地域観光に貢献する英語教育を探る必要があると思われる。

注) 本研究は JSPS 科研費 JP18K00806 の助成を受けたものである。

参考文献

- 岩田 聖子 (2019). 地域に貢献する観光英語 和歌山県田辺市本宮町における世界遺産地域を中心にして『追手門学院大学基盤教育論集』6, 1-11.
- Oxford, R. L. (2018). A developmental perspective on third-age learning. In D. Gabrys-Barker (Ed.), *Third age learners of foreign languages* (pp. 3-18). Bristol: Multilingual Matters.

オンライン教材への異なる指示の効果

Effects of Different Instructions on Online Materials

森田 光宏 (広島大学)

高橋 有加 (広島大学)

キーワード： オンライン教材， 指示， 語彙習得

1. はじめに

オンライン教材を学生に使わせるためには、教員が学習を促す指示を与える必要がある。高橋・森田 (2019) では、小テストを課した場合と教員が単に使用を推奨した場合を比較し、小テスト群のほうが推奨群よりも定期的にオンライン教材を使用し、また、事後テストでも小テスト群の得点が推奨群よりも統計的に有意に高かった。本研究では、教員が学習範囲を指定した場合には、どの程度の学習を促進し、学習成果に効果があったかを、小テスト群と比較し、調査した。

2. 参加者と手順

参加者は、広島県東広島市の大学生1年生 88 名であった。高橋・森田 (2019) では、第1ターム (4月～6月初旬までの8週間) に必修の教養教育英語科目を履修した学生を対象としたが、本研究では、第2ターム (6月初旬から8月初旬の8週間) の履修者を対象とした。小テスト群、学習範囲指定群は、それぞれ 44 名の受講者であった。主にリーディングを中心とした授業で、教科書は同じものが使われた。オンライン教材には ALC NetAcademy Next 英単語パワーアップコース TOEIC(R)テスト編の中級を用いた。小テスト群では、週2回の授業で毎回4ユニット分を1つのまとまりとして単語テストを課し、その結果を成績の 25%とした。学習範囲指定群は、小テスト群と同じだけの学習量 (52 ユニット) を指定し、締切日 (第15回授業) までに各自学習してこることとし、そこでの学習を成績の 10%とした。

3. 結果と考察

オンライン教材へのアクセスは、小テスト群が毎回の授業に連動して、定期的に学習しているのに比べて、学習範囲指定群では、締切日直前でのアクセスが極めて多いことがわかった。効果測定としてオンライン教材付属の実力診断テストを事前事後テストとして用いた (記述統計は表1参照)。一般化線形混合モデルを用いて分析を行った結果、小テスト群が統計的に意味のある差をもって学習範囲指定群よりも得点が伸びていることが分かった。この結果より、オンライン教材へ異なる指示を与えることで、異なる学習行動を促し、学習成果に違いが生まれる可能性が示唆された。

表1
事前事後テストの記述統計

	事前テスト		事後テスト	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
小テスト群 (N = 44)	57.61	6.39	67.09	5.23
学習範囲指定群 (N = 44)	57.98	6.63	65.20	7.49

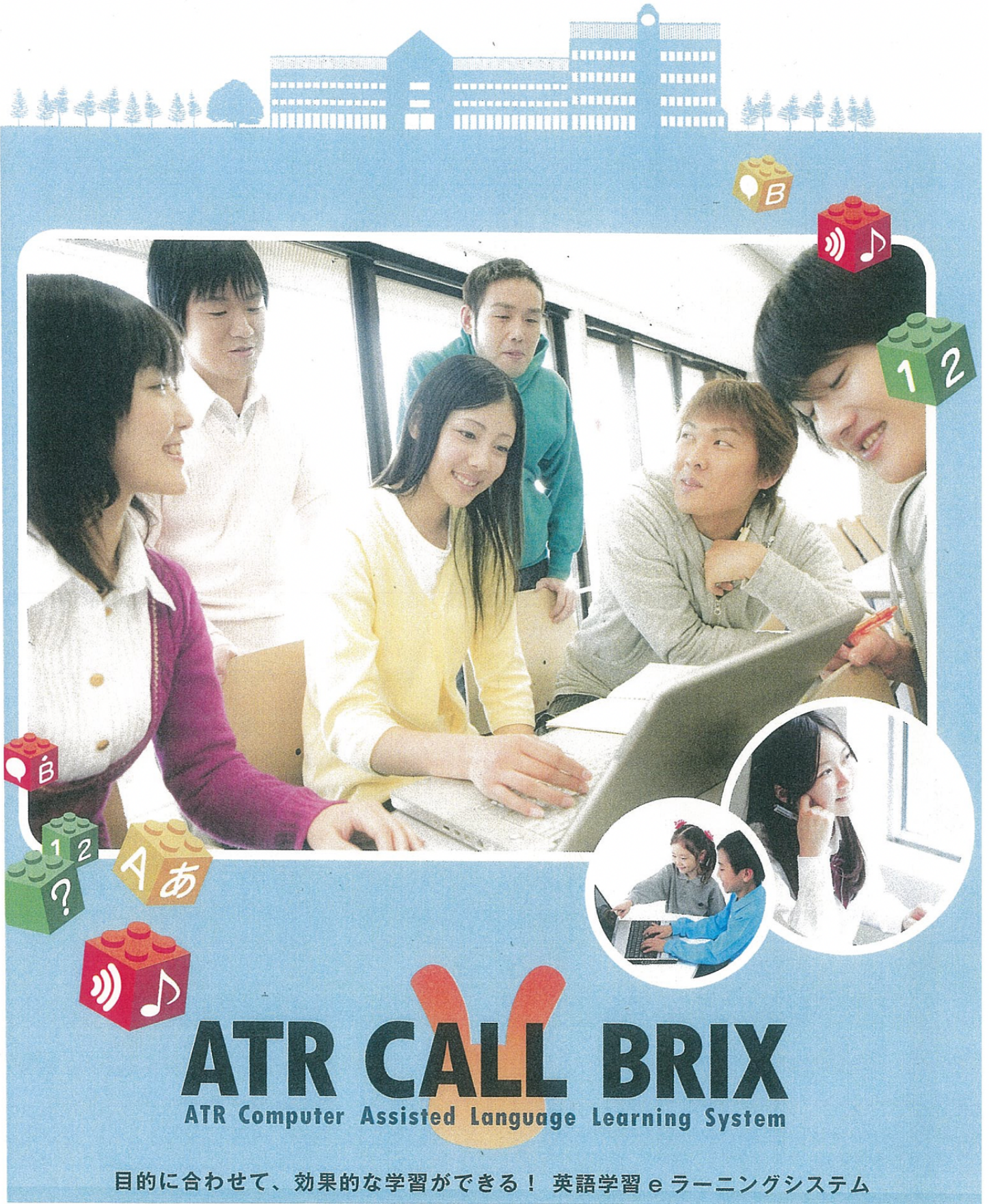
参考文献

高橋有加・森田光宏 (2019). オンライン語彙学習の効果検証 —ALC NetAcademy NEXT 英単語パワーアップコース TOEIC(R)編の事例— 『全国英語教育学会第45回弘前研究大会発表予稿集』 48-49.

UCHIDA

ウチダホームページアドレス
▶ <http://school.uchida.co.jp/>

製品紹介ホームページアドレス
▶ <http://www.atr-lt.jp/products/brix/index.html>



ATR CALL BRIX

ATR Computer Assisted Language Learning System

目的に合わせて、効果的な学習ができる！ 英語学習 eラーニングシステム

内田洋行

公共本部

東京 〒135-0016 東京都江東区東陽2-3-25

☎ 03(5634)6402

大阪 〒540-8520 大阪市中央区和泉町2-2-2

☎ 06(6920)2641